

会計簿にみる教区ギルド

——中世後期リンカンシャ・スリーフオードを例に——

齊藤 真生子

はじめに

教区教会を基盤に、教区民である俗人を中心として組織された教区ギルドと呼ばれる団体は、特に中世後期に数多く存在した。煉獄思想と結びついたメンバーの死後の救済のための祈りや、特定の聖人への崇敬といった宗教的な目的を持つとともに、現世の社会生活においても、チャリテイやメンバー同士の相互扶助を通して重要な機能を果たしていたとされている。都市、農村地域を問わず存在し、民衆によって構成された教区ギルドは、制度史的な研究だけでは描き出すことのできない中世社会の姿を探る上で重要な媒体であり、現在も継続して研究が蓄積されている。はじめに、中世後期イングランドの教区ギルドについての研究史を概観し、そこで用いられている史料についてまとめた上で、本稿の目的を述べることにする。

第一章 教区ギルド研究の問題点及び本稿の目的

第一章第一節 イングランドの教区ギルド研究史

イングランドにおける教区ギルド研究の始まりは一九世紀末から二〇世紀初頭に遡る。⁽¹⁾その後、一九七〇年代に入ると教区ギルドは新たな注目を集めた。C・フィズイアン⁽²⁾、アダムスはコヴェントリの都市共同体における政治的階層構造を分析する上で、M・ルービンはコーパス・クリステイ信仰や、都市におけるチャリテイに関する研究で、それぞれ教区ギルドを扱った。また、S・レナルズは中世盛期の社会と国家を共同体的性格によって特徴づける試みの中で、集团的行動を表現する枠組みの一つとしてギルドをとらえている。⁽³⁾このように、それぞれの文脈において扱われてきた教区ギルドの研究は一九八〇年代に入り新たな展開をむかえた。G・ロツサーは中世のウエストミンスターの歴史を描くことによって、領主制的性格を残した中小都市の「都市的」な本質を指摘した画期的な研究を行った。⁽⁴⁾そこでウエストミンスター⁽⁵⁾の都市共同体の本質を示すものとしてロツサーが明らかにしたのは、領主であるセント⁽⁶⁾ピーター大修道院長の代官によって開かれる領主裁判法廷という既存のシステムや、教区ギルドをはじめとしたボランティアな組織を利用して、都市的問題を共同体的に解決していたウエストミンスターの住民の姿であった。⁽⁷⁾その後一九九〇年代にかけて発表されたロツサーの一連の研究は、主に教区ギルドの共同体としての側面を、教区やクラフト・ギルドといった他の組織との関係性などを通じて明らかにするものであった。⁽⁸⁾それにより、従来は敵対関係にあったと考えられてきた制度的教会の司牧単位である教区と俗人によって創設されたギルドとの関係は、相互補完的なものであったとする見解が定着するとともに、中世後期の様々な社会的コンテクストにおいて教区ギルドをとらえることによって、教区ギルド研究の重要性や広がりを示したといえる。

一九九〇年代後半以降は、特定の地域における都市や農村の教区ギルドに関して、ギルド史料の掘り起こしや、それらの史料を用いた実証研究が盛んに行われ、ケンブリッジシャ、ヨークシャ、イーストアングリアの教区ギルドについての専門書がそれぞれ刊行された⁽⁶⁾。また、C・ダイアーは近年発表した論文のなかで、中世における都市人口の大部分が居住していた小都市の重要性を訴えており、特に領主の支配下にある小都市においてギルドやフラタニティといった組織は領主の管理下ではなく住民が集うことのできる機会を提供していたと述べている⁽⁷⁾。このように、教区ギルド研究の近年の傾向としては、教区ギルドという組織が社会的・経済的・政治的・宗教的側面を持ち合わせていたことを共通認識としつつ、特に教区ギルドと教区との関係に関心が向けられているように思われる。しかし、未だその地域的検証は史料の残存状況の良いエリアに限られており、本稿で扱うリンカンシャについてもこれまで本格的な教区ギルド研究は存在しない。また、ダイアーが述べるような地方小都市における教区ギルドについても、より多くの個別研究が必要とされと考えられる⁽⁸⁾。

第一章第二節 教区ギルド研究における史料と本稿の目的

研究史の概観で述べたように、ここ数年の教区ギルド研究においては、史料の掘り起こしによる地域ごとの実証研究が盛んに行われてきている。それでは、中世後期の教区ギルドについて我々が利用できる史料には、どのようなものがあるのだろうか。

教区ギルドについての史料は、その作り手を主体として分類するならば、政府による記録、教会による記録（おもに遺言書）、地域史料（マナ史料、教区委員会計簿）、ギルド自身による記録、に大別される。

政府による記録として有名なものには、一三八九年のギルド調査と宗教改革が進められていた一五四六、四八年のギル

ドや寄進礼拝堂を対象とした調査が挙げられる。特に、一三八九年のギルド調査記録は一八七〇年にJ・トールミン・スミスによって編纂・刊行されて以来、教区ギルドの基本的史料とされている⁽⁹⁾。現在はPublic Record Officeに四八〇件、オックスフォード大学ボードリアン図書館に四件、計四八四件のギルド調査記録が所蔵されている⁽¹⁰⁾。調査によってまとめられた創設の状況や、規約などについての記録はギルドを知る上で基本的な情報を提供するものではあるが、全国的な調査とはいえ、オリジナルの多くが失われており、調査当時存在した全てのギルドを網羅していないため、地域的な広がりを見るには不適切であること、また、全てのギルドが一三八九年の調査以前に創設されたとは言えないこと、あるいは、政府による記録という点でギルドの実際の活動を見るには扱いづらい要素があること、といった問題点も多い。一五四六、四八年の調査は、宗教改革による寄進礼拝堂、ギルド、施療院の解散への過程において行われたものである。施設や組織の創設の目的、教区教会からの距離、施設の必要性、財産目録、不動産所有などについて記録が残された⁽¹¹⁾。一三八九年以来の全国的な記録とはいえ、既に解体していたギルドも多いこと、また、王権にたいして財産を隠匿しようとする動きが見られたこと⁽¹²⁾などが、問題として挙げられる。

教会による記録は遺言書が挙げられる。教区ギルドが遺言書のなかで遺贈先として指定されることから、それによって人々の教区ギルドとの関係を見ることが可能であるため、遺言書が豊富に残っている地域においては魅力的な史料ではある。しかし、遺言書が地域的・時代的にまとまっていない場合、情報がまばらすぎて、特定のギルドとの関係を見るのは非常に困難だと言える。また、遺言書だけでは、教区ギルドの規模や機能、あるいは遺言者の社会的な地位などが分からない、という欠点もある⁽¹³⁾。

地域史料としては、教区ギルドの不動産所有の様子を知ることのできるマナ史料や、教区教会との関わりを探る上で重要な史料とされる教区委員会計簿がある。しかし、必ずしもギルドへの言及が多く見られず、また、現存する教区委員会計簿の少なさを考えると、教区ギルドとの対応関係を見るには難しい状況にある⁽¹⁴⁾。

最後にもっとも重要な教区ギルド自身による記録である。これまで挙げてきた史料は、「教区ギルドについての記載がある」補足的な記録にすぎず、ある特定のギルドについて調べるには、やはり核となるギルド自身の史料が欠かせないと考えられる。ギルド史料としては、規約や会員リスト、会計簿、議事録、財産目録などのバリエーションがあるものの、現在残存する史料が極めて少ない、あるいは、残っていても断片的な記録でしかない、といった大きな問題点がある。

とはいえ、教区ギルドという多様性・柔軟性をもつ組織が、それぞれの地域的・社会的コンテクストにおいてどのような機能を果たしていたのかを知るためには、個々の実証研究の積み重ねが不可欠である。そこで、断片的であったり、利用価値が低いとされて、今まできちんと利用されてこなかった教区ギルドの史料を、いかに活用するかが今後の研究において一つの重要な課題であると考えられる。

本稿の目的は、これまで史料としての分析がほとんど行われてこなかったリンカンシャ、スリーフォードのホーリー・トリニティ・ギルド（以下トリニティ・ギルドと略）という教区ギルドの会計簿を用いて、地方の小都市における教区ギルドについての実証研究を行うことである。そのためには、第一に未刊行の史料である会計簿を転写し、次に、会計簿について史料論的に考察することを通して、これまで史料として扱われてこなかった会計簿の特徴や、史料としての効力を見出す作業が必要である。それによって、会計簿から読みとれるトリニティ・ギルドの姿を分析し、最終的には、スリーフォードのような小都市における教区ギルドの特徴や機能について考察していきたい。

第二章 ホーリー・トリニティ・ギルド会計簿の分析

第二章第一節 会計簿の概要

本稿では、リンカンシャ南部の小都市スリーフォードの教区ギルドであるトリニティ・ギルドの会計簿を史料として用いる。まず最初に、この会計簿の史料としての概要を説明したい。

トリニティ・ギルドの会計簿は、現在、ブリティッシュ・ライブラリにBL MS Add 28533 Guild of the Holy Trinity, Slefordとして収蔵されている。また、このギルドに関する記録で唯一残っているものがこの会計簿であり、ギルド史料の他の要素である規約・会員リスト・議事録といったものははじめから存在しなかったか、散逸したかのいずれかであると思われる。

ブリティッシュ・ライブラリによって付されている史料説明 (Description)⁽¹⁵⁾ は、他の一般的な史料説明と比較して短く、また内容も乏しいものである。おそらくは、この会計簿が史料としてこれまでほとんど用いられて来なかったことが、こういった不十分な史料説明しかついていない理由の一つではないかと考えられる。そこで、会計簿の史料学的な情報についてできるかぎり補足する。

形状としては、約二四×三五cmの十七枚のフォリオ（白紙部分や切れ端を含む）から構成されており、未製本で、表紙などは含まれておらず、素材は紙である。⁽¹⁶⁾ 内容としては、一四七七年から一五四五年にかけての会計記録がほぼ一年ごとに記載されている。使用言語は、各年度の冒頭部分のみがラテン語で、本文にあたる会計記録が英語（時折、ラテン語の単語が使われる）というのが基本的なパターンとなっている。

史料の来歴については以下の通りである。一八一〇年からスリーフォードのヴィカーであったRichard Yerburchが、おそらくは教区教会内に残されていたギルド会計簿を発見・保管し、スリーフォードの町の歴史を編纂した。⁽¹⁷⁾ その後、詳しい経緯は不明だが、史料の冒頭に「一八七〇年 F.J.Furnivallによって購入された」とあるように、Furnivallの史料収集活動を通して、ブリティッシュ・ライブラリに収蔵されて現在に至ったものと推測される。⁽¹⁸⁾

トリニティ・ギルドの会計簿はこれまで幾人かの研究者によって史料として用いられてきたものの、いずれも十分な分

析がなされてはいない。例えば、会計簿を発見したRichard Yerburchによる地域史研究においても、ギルドに関する記述はごくわずかである。⁽¹⁹⁾ 教会史家のDorothy M. Owenも中世リンカンシャでのギルドの会費や聖体祭についての一例として史料の一部を引用しているに過ぎない。⁽²⁰⁾

このため当然のことながら、会計簿のマニスクリプトを活字にして刊行したものも存在しない。したがって、会計簿を活字に転写することは重要な作業であると思われる。⁽²¹⁾

第二章第二節 中世後期スリーフォードの概観

「Hayderから約一マイルのところ、私はCattely修道院の遺構を目にした。これは今やスリーフォードのCarのもの、彼は全くのジェントルマンであり、彼の父親は裕福なステイプル商人であった。・・・スリーフォードの教会は大きい。そして、町の屋敷で注目したいと思うものは二件だけである。一つは、リンカンの十六ポンドの聖職禄として名士のものとなっており、教会の東の端に位置する。そして、Carre Houseは教会の南側にある。」⁽²²⁾

これは、イングランドで最も古い好事家の一人といわれるジョン・リーランド（一五〇六？—一五五二）が残した一五三五—一五四三年にかけての旅行記からの引用である。⁽²³⁾ リーランドの記述にも登場するスリーフォードの教会とは、本稿で取り上げるトリニティ・ギルドがその拠点としたスリーフォードの教区教会、聖デニス教会である。本節では、ギルド会計簿の分析に先立って、ギルドが存在したスリーフォードという町の概観をまとめていきたいと思う。

① 中世後期スリーフォード

スリーフォードはリンカンシャの州都リンカンの南三〇キロ、スリー川沿いに位置する都市である。スリー川はスリーフォードの約二〇キロ東方でWitham川に合流しているためにWitham川の河口付近に位置する都市ボストンとのつなが

りも強かったと考えられる。⁽²⁴⁾

スリーフォードは一一二三—一三九九年にかけてリンカン司教アレクサンダーによって城が建てられ、これにより地域の商業の中心地としての本格的な発展を始めた⁽²⁵⁾とされる。中世を通じてリンカン司教を領主としていたスリーフォードは、農村ではなく、地域の商業的中心であったが制度的には自治都市としての権利を獲得してはいなかった。⁽²⁶⁾住民の権利は自治都市土地保有状態に留まり、裁判権などは領主であるリンカン司教の支配下に置かれていた。⁽²⁷⁾

都市としての規模を正確に推測することは難しいが、一三三二年の俗人特別税記録によるとスリーフォードの課税対象人口は六十七名で、税収は十四ポンド五シリング八ペンス四分の一であった。これはリンカンシャーにおいて人数では九番目、税収額では六番目である。⁽²⁸⁾また、毎週の定期市および年四回の市が開かれ、ヘンリ二世から市場開設権特許状を与えられていた。⁽²⁹⁾以上のことから、中世のスリーフォードは小都市でありながらも、農村地域に位置し対抗する都市も少ないなかで、地域の中心地としての役割を果たしていたと考えられる。⁽³⁰⁾

②聖デニス教会

スリーフォード教区の教区教会である聖デニス教会は、一二〇〇年頃に町の広場に面して建てられ、現存する建物的大部分は十四世紀半ばに数十年にわたって建設が進められた。⁽³¹⁾このスリーフォード教区からの十分の一税は一六一六年の時点で年間十三ポンド、コミュニティは四四〇名だったとされる。⁽³²⁾また、教会の北の側廊には処女マリアに奉献されたチャペルがあり、一二七一年にThomas BlountとJohn de Buchamの二人のスリーフォードの商人によって創設されたものである。彼らはスリーフォードやオールド・スリーフォードなどの多くの不動産をこのチャペルに寄進し、彼らの死後は「スリーフォードのコミュニティから選ばれたふさわしい人々によって」チャペルが維持されるように遺言書に指定したという。⁽³³⁾このチャペルとトリニティ・ギルドとの関係は定かではないが、「スリーフォードのコミュニティ」に維持を託されたチャペルが、中世後期には町の有力ギルドであるトリニティ・ギルドによって管理されていた可能性も考えら

れるのではないだろうか。

③Carre家とスリーフォード

最後にスリーフォードの有力者で会計簿にも頻繁に登場し、トリニティ・ギルドと深い関わりを持っていたと思われるCarre家について簡潔に述べておきたい。

もともとノーサンバランド出身のアングロノルマン家系であったCarre家がスリーフォードに居を構えたのはヘンリ七世期のことであった。ノーサンバーランドHetton出身のGeorge Carreはステイプル商人として羊毛の輸出で財をなし、スリーフォードおよびその近郊の土地を購入した。そして、聖デニス教会の南側にリーランドの旅行記にも登場する“Carre House”と呼ばれる屋敷を建ててスリーフォードに移り住んだという。その後、Geogeの三男（長男、次男は夭折）Robert Carreは、スリーフォードおよび周辺において、宗教改革による修道院解散や私権喪失によって没収された多くの財産を獲得していった。Robertの四男Sir Edward Carreの時代には、Carre家の不動産所有はリンカンシャー以外のヨークシャー、ハンチンドンシャーにも広がり、またEdwardの長男Sir Robert Carreは一六三六年にSleaford Hospitalを創設するなど、Carre家はスリーフォードに拠点を移した後一五〇年程度のうちに商業的にも、政治的にも、また町の名望家としても成長し実績をあげていったと言える。³⁴

以上が本稿の舞台・中世後期スリーフォードの概要である。中世後期のスリーフォードという町についての記録はほとんど無く、歴史研究もわずかしが行われていないため詳細かつ網羅的な姿を描き出すことは困難であるが、リンカン司教領としてのスリーフォードや、農村地域での商業的中心としての様子が明らかになったと思われる。また、中世後期から近世にかけて成長したCarre家が、ちょうど本稿で扱う会計簿が記録されている時期にスリーフォードでの礎を築いたことにも注目していきたい。

第二章第三節 「計算の合わない会計簿」

（ホーリー・トリニティ・ギルド会計簿の史料論的考察）

近年、歴史研究において関心を集めている「史料論」という議論について、岡崎敦氏が「西洋中世史研究と史料論」と題して、その概要、意義を述べておられる。「史料論」とは、実際に個々の実証手続きにおける具体的な史料の利用にあたっての実践的な問題関心として現われるものであり、その「史料論」の基本的性格の概観について岡崎氏は三つの論点にまとめている。

第一点は、史料概念の柔軟化という問題提起であり、史料の存在様態をはじめとして史料そのものへの理解を喚起するものである。第二点は、様式論から機能論への問題関心への移行である。特定の史料の形式的特徴を時間軸・空間軸において体系化する従来の様式論的発想とは異なり、ある歴史過程において、特定の史料が実際に、どのように利用されることで効力を発効するののかということに関心を向けることが、近年盛んに試みられているという。第三点は、本質主義から関係主義への発想の転換という動きである。つまり史料の解釈に際して、史料と現実との関係を自明のものとしてとらえるのではなく、むしろ多様な関係のなかに特定の史料を位置づけようとする試みである。

これらの史料論と言われる議論は、既に述べたように個々の実証研究での史料利用に先立って行われてきたのであり、本稿においてトリニティ・ギルドの会計簿を分析するにあたって、こういった史料論的考察は必要であると思われる。なぜなら、そのことによって、従来は「会計簿」としてほとんど利用価値がないとされ、きちんとした分析をされてこなかった会計簿に、新たな史料としての利用価値、意味を見出すことができるかと考えるからである。

①会計簿はどのように作成されたのだろうか？

まず、トリニティ・ギルドの会計簿がどのように作成されていたのかという問題について、史料から可能な限り考え

てみたい。

この会計簿の形状を見ると、第一に製本されていないという特徴がある。つまり、持ち運びがしやすい製本済みのノートのような形状のものに記録されていたのではなく、一枚ずつに分かれたフォリオの形状のものに記録されている。そういった形状から考えても、おそらくは、頻繁に持ち出して閲覧されたり、歴代の役員に持ち回りにされるようなものではなく、教区教会である聖デニス教会の決められた場所に保管し、新たに会計簿に記録が行われる際に持ち出されるようなシステムだったのではないだろうか。

書き手については、史料の筆跡を筆者が見たところでは、一四七七—一四八一、一四八二—一四九二、一四九三—一四九七、一四九八—一五〇六、一五〇七—一五〇九、一五一〇—一五二〇、一五二一—一五二四、一五二五—一五三七、一五三八—一五四四というように、数年ごとに変化している。一見して違う筆跡が書記の変化を意味するとは限らず、はつきりとしたことは言えないが、それでも筆跡に変化が見られるということは、この会計簿が後世の人物によって作成された写しであると言うよりは、同時代の人の手によって書き継がれ記録されていたものであると思われる⁽³⁶⁾。

また、会計簿は一四七七年から記録がスタートしているが、この時にトリニティ・ギルドが創設されたのか、という問題がある。現存する会計簿は、その形状からしてより早い時期の記録が散逸し、途中からだけ残っているという性格のものではない。それは、一枚目のフォリオの書き出しが、上半分ほど白紙になっていることから明らかである。(図一参照) おそらくは、後から装飾を加えようという意図で、上半分にスペースが空けられたものと思われる。それとともに、一四七七年の記録には、

「……(オルダマンである) John Swynshed[†] John Gylbertおよび Robert Wrightの手によって彼に渡されたソウル・スコットについて、スリーフォードの町のトリニティ・ギルドの兄弟姉妹たちのもとに、決算し、公表した計 六六ポンド十一シリング九ペンスと二分の一」(F1r)⁽³⁷⁾

とある。John Gylbert や Robert Wright は前年度の役員を務めていた人物で、繰越金を一四七七年度のオルダマンである John Swynshed に渡していると推測される。つまり、この会計簿の前に別個の会計簿が存在したかどうかは明らかではないが、ギルド自体の活動はこの会計簿が記録される前から行われていたと考えられる。

② 不十分な会計簿

次にこの会計簿の書式的な特徴について、同時代の一般的な教区ギルドであり、まとまった量の会計簿が残存しているノッティンガムの聖ジョージ・ギルドとの比較も交えながら考えてみたい。

トリニティ・ギルドの会計簿の形式の特徴としてまず第一に挙げられるのは、その記録のスタイルが数十年間のうちに何度も変化することである。当時の会計記録の主流ともいえる書式であった「Charge—Discharge System」が用いられており、The Charge (収入) や The Discharge (支出)、The Delivery (受け渡し) に記録の内容は大別する⁽³⁹⁾ことができる。確かに、会計簿の始まりである一四七七年の記録は整った書式になっており、⁽⁴⁰⁾まず最初にオルダマン、チェンバレンといった役員の名前と日付が記され、次に前年度からの繰越金の受け渡し記録、続いて収入項目の記録(ストックと呼ばれる財産の増加分、会費・入会金、寄進、チェンバレンによるモルトの売り上げ)とその小計、支出項目の記録(聖職者への支払い、デイリジエ⁽⁴¹⁾の費用、死亡した会員へのミサでの聖職者への支払い、ミンストレルへの支払い、鐘つき人夫への支払い、チェンバレンによる各種支払い)とその小計、最後に翌年度のオルダマンに選ばれた William Curwin という人物へこれらの財産が受け渡しされる、という構成である。(史料1参照)

収支項目もかなり詳しく明記されており、「Charge—Discharge System」に忠実な書式で整理されているが、この一四七七年度の会計記録は会計簿全体からすると特異なものだと言える。詳細な項目の記載は次の年から徐々に粗雑になっていき、一四八七年から一四九七年までは収支の記載は全くなく、分量も数行程度で、オルダマンからオルダマンへの財産の受け渡しが行われたことのみを記載している形式へと変化する。⁽⁴²⁾(史料2参照) その後も、一定の書式を保つことなく変

化していくが、一四七七年度のような「会計簿らしい」詳細かつ整理された書式に戻ることはない。また、この書式の変化は上述した筆跡の変化と連動しているとは、言えないため、書記によってなされたものでは、ないと推測される。たとえば、ノッティンガムの聖ジョージ・ギルドでは、トリニティ・ギルドに比べるとかなり均質に記録されている。分量はフォリオ一枚に一年分がまとめられ、形式についても、史料集に収められている最初の年度である一四五九年のようなスタイルが、多少の変化はあれど継続されている。また、記録の日付についても聖ジョージ・ギルドが毎年決まって聖ジョージ・ギルドの祝日であるのに対し、トリニティ・ギルドは決まった日というのではなく、その年毎に異なった日付が記録されている⁽⁴³⁾。

以上のような書式の変化とともに、トリニティ・ギルドの会計簿のもう一つの大きな特徴は「計算が合わないこと」である⁽⁴⁴⁾。会計簿に記載されている支出や収入の項目を合わせても、それぞれの小計と合うことはなく、数ポンドもの差が生じることも珍しくない。これはつまり、一年間にギルドによって行われた金銭的な活動の全てがこの会計簿に記録されていたのではなく、また、この会計簿が第三者の監査を受けるような性質のものでもなかったことを示しているのではないだろうか。聖ジョージ・ギルドの詳細な会計簿と比較しても、トリニティ・ギルドの会員たちが、この会計簿を「支出を算出し、使途を記録する」という現在の我々が考えるような目的で用いていたのではないことは明らかである。

トリニティ・ギルド会計簿は以上のような特徴によって、一般的な会計簿史料としては情報が極めて不十分であり扱いにくいということになってしまい、それが今まで史料として利用されてこなかった一因とも考えられる。なぜなら、記録の書式も統一されておらず、計算も合わず、全体に使途の記載が粗雑なこの会計簿を用いて、従来の会計簿に対して行われてきたような経済史的な分析を試みることは難しいからである。例えば、使途の分析からギルドの活動状況を明らかにしたり、財産の増減からギルドの規模が拡大・縮小する様子を数量的に分析することに関しては、この会計簿がそもそも使途や金額の記載を重視して作成されていない以上、信憑性のある議論はできないと言える。つまり、会計簿という史料

の存在様態からその利用法を決定するのではなく、この会計簿がどのような方法で史料としての効力を発揮するのかを考えていかなければならない。⁽⁴⁵⁾

③会計簿に書かれていることは何か？

それではこの会計簿を作成する上で、ギルドの会員たちが重要視したものとは何だったのかを、会計簿から見出すことはできないだろうか。

先に述べたような、書式の変化や計算の乱れ、使途項目の不十分さといった点とは対照的に、この会計簿を通して記録が継続しているのが「人名」である。会計簿の分析においては、付随的な情報として扱われがちな人名の記録ではあるが、トリニティ・ギルドの会計簿を分析する上では極めて重要で注目すべきポイントであると思われる。その理由としてあげられるのは、会計簿の記録が始まって数年後に現われる一つの大きな変化である。

その大きな変化とは一四八六年からの「立会人」の出現である。つまり、オルダマンからオルダマンへと毎年ギルドの財産が受け渡される際に、「誰々の前で」という形で受け渡しに立ち会った人々の名前がこの時点からとぎれることなく記載されるのである。これは、会計簿の書式が変化し続ける一方で、最後まで変わることなく続けられるこのギルドの慣習となっていく。そして、一四八六年の会計記録から立会人が出現する契機として注目されるのが、その三年前、オルダマンRobert Applebyの「出来事」である。(史料3参照)

一四八二―三年のオルダマンはRobert Applebyという人物であるが、そのApplebyがオルダマンを務めた翌年は記録が白紙のまま、翌々年にあたる一四八四―五年の会計記録には以下のように記されている。⁽⁴⁶⁾

「Robert Applebyは上記の財産のうち彼の手元にある五ポンド一四シリング四ペンスについて、返答し弁済しなければならぬ。そしてまた、上述のRobert ApplebyはオルダマンWilliam Curwinと彼ら(ApplebyとCurwin)の間で作成された証書に記されている部分についてのインデントチュアを作成すること」(f4v.)

William Curwinというのは、この翌年一四八五―六年のオルダマンであるが、その年一四八五―六年の会計簿の収入項目には次のようにある。

「Robert Applebyの手元に証書の形で残っているものについての項目、十一ポンド三シリング八ペンス」(45r.)

Appleby がオルダマンであった際に具体的にどのようなことをしたのか(ギルドの財産を着服したのか、あるいは、Appleby 自身が没落してしまったのか)は分からない。しかし、この二つの記録には一四八三年か八四年⁽⁴⁷⁾に Appleby と Curwin の間で作成された証書で合意した金額(のうち、その年度ごとの分割払い分)について書き込みがされており、Appleby がギルドに対して債務を負っていることは確かである。そして、William Curwin がオルダマンを務めた一四八五―六年の会計記録から立会人の名前が登場している。⁽⁴⁸⁾ Appleby の行動によってギルドの会計・資金管理が混乱し、そのことが問題化したために、立会人というシステムが採用されるようになったと考えることはできないだろう。⁽⁴⁹⁾

これ以降、毎年必ず、オルダマンからオルダマンへの財産の受け渡しの際には平均五―六名の立会人の名前が記録され、多い年には十名もの名前が書き込まれている。⁽⁵⁰⁾ このことは、会計簿の収支項目の粗雑さとは対照的である。また、受け渡しについても、ノッティンガムの聖ジョージ・ギルドでは受け渡しの相手が、オルダマンであったり、チェンバレンや教区教会の聖職者であったりと一定ではないのに対し、トリニティ・ギルドでは必ずオルダマンからオルダマンへというように記録がなされている。つまり、トリニティ・ギルドの人々はギルドの財産がオルダマン同士によってきちんと受け渡しされることを重要視し、さらに会計簿に記録を書き込む際には、本来の会計簿記録で重要事項とされるような収入や支出の詳細な項目、金額の出入りといったことを「会計簿に色々書く」ことよりも、「誰が確認したかをきちんと記録しておく」ことの方に興味を持っていたと考えられる。そして、そのことは人の記憶に頼ることよりから書かれたものに対する信頼へと移行するという一般的な議論⁽⁵¹⁾には逆行してはいるが、このギルドの人々が財産を管理するにあたって、文字による記録よりも人がきちんと確認したという保証行為に信頼を置かざるをえないような状況があったと言うことを意

味していると考えられる。

以上のように、トリニティ・ギルドの会計簿は金銭的な情報を詳細に記録するためというより、立会人のもとでオルダマンからオルダマンへギルドの財産が受け渡されたことを証明する手段として記録されていたと考えられる。ギルドの経済的活動の様子を分析することには向かない会計簿ではあるが、会計簿に多く登場する人に注目することで、この会計簿の史料としての効力を見出すことができるのではないだろうか。

第二章第四節 会計簿に見るホーリー・トリニティ・ギルド

前節ではトリニティ・ギルド会計簿を史料論的に考察し、役員や立会人として会計簿に書き込まれた人の名前に注目することが、この会計簿の史料としての価値を見出す方法であると論じてきた。しかし、人の名前以外の収入や支出の項目といった会計記録の中からもギルドの姿について読みとれる部分があり、まずそれらの会計記録をもとにギルドの活動の様子について見ていきたい。

①会計記録の分析

まずはじめにトリニティ・ギルドの規模や財政状況について可能な限り考えてみたい。会員名簿などは残っていないため会員数を推定することはできないが、会計簿に記されているギルドの財産から推測すると、都市の規模のわりに豊かなギルドであったことがわかる。オルダマンからオルダマンへの受け渡しがされたとして記載される金額が、おそらくその時点でのギルドの財産の総計だと思われるが、その金額は一四七七年から一五四四年までの期間を通して、少ないときでも三〇ポンド前後、多い時期には八十四ポンドにもなっている。一五三五年に国王の査定官は、司教領としてのスリーフオードから年約五十七ポンドの税金を見込んでいた。⁽⁵²⁾ この司教領全体の年間税金に匹敵、あるいはそれを越えるほどの

財産を保有していたことからしても、ギルドはかなりの富を蓄えていたと言えるのではないだろうか。

また、一四七七、一四八〇、一四八一年、一五〇一年には五ポンド六シリング八ペンスが、一四八三年には六ポンドが聖職者への一年間の俸給としてギルドによって支払われている。聖デニス教会の南側の側廊にチャペルを保有していたギルドがそこでの典礼のために独自に聖職者を継続的に雇っていたと考えられる⁽⁵³⁾。

ギルドの会費や入会金については、それらを定めたギルド規約がないため、正確な金額は分からない。しかし会計簿には、*Item of old soulscot*, *Item of new soulscot*, *Item of new brothered*, という記載が見られ、*Item of old soulscot* はその時点で既に会員になっている人々から徴収された会費を、*Item of new soulscot* あるいは *Item of new brothered* と書かれているものはその年に会員になった人から徴収した入会金を意味していると思われる⁽⁵⁴⁾。一五〇九年の会計記録には、オールド・チェンバレンが会員からの徴収金を、ヤング・チェンバレンが新会員からの徴収金を回収してきたとある。十六世紀以降は、会費からの収入は平均して三ポンドから五ポンドの間、入会金からの収入は多いときには二十シリング以上、少なくとも十シリング前後であった。一方、会計簿がスタートして間もない数年間では、会費とされる *old soulscot* はほんの僅か、あるいはゼロで、入会金とされる *new soulscot* が数ポンドにのぼっており、これがどのようなことを意味するのは興味深い点である。これは小規模だったギルドがこの時期に急成長したということを表わしているのだろうか⁽⁵⁵⁾。

その他、会計記録の個々の項目から読みとれるギルドの活動について見ていきたい。ギルドが毎年開かれる祝宴のためにテーブルウェアを揃えていたというのは一般的に見られる事実だが、真鍮のポットの代金の支払い記録や、ギルドが所有する聖餐杯、カップボード、錫の皿の数量が記載されており、さらにその数が徐々に増えてゆくことから、トリニティ・ギルドが祝宴のための用具を徐々に揃えていった様子が見て取れる⁽⁵⁷⁾。

また、スリーフォードでは、リンカンやボストンと同様に、コーパス・クリステイ・プレイが俗人の手によって行われており、聖史劇や聖人伝を描いたページェントが一般に催されていたという。⁽⁵⁸⁾この会計簿にもコーパス・クリステイ・プレイのための出費が幾つか記録されている。それらはコーパス・クリステイ・デイのミンストレルや、キリスト昇天の劇のための脚本およびスピーチ執筆、神のための衣装の色付けへの支払いであり、これらのことからギルドがページェントの準備を行っていたことが分かる。⁽⁵⁹⁾

最後に、宗教改革期の変化について会計記録から分析してみたい。もともと粗雑な会計記録のため、宗教改革期になってから会計簿に大きな変化が見られるというようなことはないが、ひとつ注目されるのは会費・入会金に減少傾向が見られる点である。リンカンシャにおいて行われていた教区聖職者に対する生活実態調査に端を発したリンカンシャ住民の反抗や、その反抗の共謀者としてスリーフォード郊外のオールド・スリーフォードに屋敷を構えていたHassall家が私権剥奪されたといった出来事が生じた一五三六、三七年以降に大きな変化が見られるのかとも考えられたが、むしろその変化は一五四〇年代に入ってから現われているように思われる。会費の記録は平均して三ポンドから五ポンドだったものが、一五四一年には一六シリングになり、また、入会金は少ないときでも十シリングだったものが、一五四一年以降は二、三シリングに留まっている。⁽⁶⁰⁾このことから、スリーフォードにおいては特に一五四〇年代に入ってから、教区ギルドの会員になり続けることや、新たに加入することの意味が失われていったと考えることができるのではないだろうか。

②会計簿に記録された人名の分析

会計簿に書き込まれている人物の名前は、その大部分がオルダマン・チェンバレンといったギルドの役員、あるいは立会人として記録されているものである。⁽⁶¹⁾まずは、その役員や立会人について分析してみたい。

ギルドの会計記録には毎年オルダマン、チェンバレンの名前が明記されており、そこから歴代の役員をまとめたものが表一である。毎年一名のオルダマンと二名のチェンバレンが選ばれ、任期はそれぞれ一年である。チェンバレンは一五〇

八年から、オールド・チェンバレンとヤング・チェンバレンに区別して記録されるようになるが、ヤング・チェンバレンを務めたものが翌年オールド・チェンバレンになるという慣習は、会計簿が開始された時点から変わらず続いているものと推測される。また、オルダマンの顔ぶれに注目してみると、一四八〇年代後半から一四九〇年代前半にかけてオルダマンを務めた Richard Wecham, William Fewlar, Robert Bateson, William Pyder, Robert Heyneson の五名が、一五〇〇年代前半に繰り返しオルダマンを務めていることがわかる。このことは彼らの一団が一四八〇年代半ばから二〇年近くギルドの指導的な立場にあったことを示しているのではないか。また、特にチェンバレンについて言えることであるが、毎年チェンバレンとして新たな人材が登用されていることから考えて、ギルドにはそれだけの新たなメンバーがコンスタントに加盟していたと推測される。

次に、立会人について考えてみたい。ここで注目されるのは、立会人の人数の多さと、一定の人々が長年にわたって立会人として記録されるという連続性である。立会人になる人物はたいがい役員経験者であることが多いものの、毎年その顔ぶれは変化しながら常に五人程度、多いときには十人もの人々が立会人として記録されている点は大きな特徴だと思われる。また、表二の立会人の欄からは、毎年継続してではないものの十年、二十年以上にわたって立会人として記録されている人物も多いことがわかる。例えば、Robert Bolar (No. 16) は一五二一年から一五四二年にかけて、Rafe Carre (No. 27) は一五二〇年から一五四〇年にかけて、Robert Gybbe (No. 59) は一四九六年から一五二二年まで、William Pyder (No. 83) は一四八七年から一五〇九年まで、John Rande (No. 84) は一五二〇年から一五三二年まで、立会人として記録されていた⁽⁶²⁾。また、おそらく同姓同名の父子と思われる John Fescher (No. 42) や John Wecham (No. 113) など、それぞれ三十五年間、四十年間にわたって父子でギルドの財産受け渡しに立ち会っていることになる。このように長期間にわたってギルドの財産管理に関わっている人物や家系が存在することで、このギルドの運営が支えられていたとも考えられるのではないだろうか。それはまた、オルダマンの役割についても影響していると考えられる。会計簿の書式に

ついで比較したノッティンガムの聖ジョージ・ギルドでは、同じ人物がオルダマンを十年以上継続して務めたり、オルダマンになる人物は極めて限定された顔ぶれであることから明らか(63)に、長期間同じ人物がオルダマンになることで、実際にギルドの指導者として機能していたのだと考えられる。しかし、これとは異なりオルダマンが一年ごとに違う人物によって担当されるトリニティ・ギルドにおいては、任期制のオルダマンによってではなく、長年にわたって立会人として登場するようなギルド会員の一人によってギルドの運営が行われていた、と考えることができるのではないか。

立会人の顔ぶれの中でも特に注目されるのが、聖デニス教会のヴィカーであったJohn Godfrey (No.54)である。John Godfreyは一五一七年から一五三七年までは毎年立会人として記録されている。Godfreyは一五一五年に聖デニス教会のヴィカーになってから一五三九年に亡くなるまでの期間、継続してギルドの立会人を務めていたのである。その聖デニス教会を基盤としていたトリニティ・ギルドにとって、教会のヴィカーが受け渡しを確認するというのは特別な意味をもっており、だからこそGodfreyは二十年間にわたってほぼ毎年、立会人として記録されていたのだろう。

また、親子や親類が世代を超えてギルドに参加している様子も会計簿から見ることができる。会計簿に記録されている名前のうち、同一の姓をもつ複数の人物の例は全部で十四例ある。⁽⁶⁴⁾これらの人数は三十五名にもなり、記録されている人物全体の四分の一以上にも及ぶ。記録に残っている中でもこれだけの割合で、親子や親類の可能性がある例が含まれているということは、会員の多くが世襲的にギルドに参加していた姿を示していると同時に、ギルドの運営を支える一定の家系が存在した可能性を示していると思われる。

次に、ギルド会員の職業や社会的地位などの問題についてできるかぎり考えてみたい。会計簿の中に職業が明記されているのは「Thomas Gybe, butcher」(No.60) および「Thomas Smith, shoemaker」(No.94)の二例のみであり、会員の職業構成を明らかにすることは難しい。しかし、Thomas Gybeのようなジェントリ層ではない人々に対してマスターという敬称が用いられているように、同職ギルドのマスターも参加していたことが推測される。⁽⁶⁵⁾女性に関しては、女性の

役員や立会人は記録されていないため、表立った役職に就く例は無かったとはいえ、一四七七年の会計記録に「トリニティ・ギルドの兄弟姉妹たち」(Tir) という表現があることから、女性会員も存在したと考えられる。また、ギルドに参加しているジェントリ階級としてはFolkyngham家 (Nos.45-48)、Leke家 (Nos.72,73) が挙げられる。両者とも複数の人間が立会人として長い間ギルドに関わりながらも、役員を務めてはいないのが特徴である。これは、教区ギルドと基本的には距離を保ちつつ必要な際に姿を現す、というジェントリの「名望家的な」教区ギルドとの関わり方に相当するものではないかと考えられる。⁽⁶⁶⁾ また、ジェントリと明記されていないものの、Carre家やCranwell家といったスリーフォード内外の有力者の名前も見られる。⁽⁶⁷⁾ 更に、地域的な広がりに関して、会計簿に記録された人名から推測される地名は以下の通りである。スリーフォードの南に位置するFolkingham、北西に位置するCranwell、南東のSwinshed、西のWilford⁽⁶⁸⁾ はいずれもスリーフォードを中心とした半径十キロほどの円に囲まれ、スリーフォードから延びる道沿いに位置している。以上のことから、ギルドは都市の内部だけでなく、スリーフォードをその中心地とするエリアの様々な階層の人々によって構成されていたと推測される。

最後に、スリーフォードの町の有力者として十五世紀後半から成長していったCarre家とトリニティ・ギルドとの関係について考えていきたい。Carre家からは、George (No.26)、Rafe (No.27)、Robert (No.28) の三名が立会人および役員として記録されており、十六世紀初頭からギルドが解散するまで四十年以上にわたってギルドと関わりを持っていたことになる。スリーフォードに居を構えたGeorgeと、その後継者であるRobert⁽⁶⁹⁾ は長期間立会人として参加しているものの、役員にはなっていない。しかし、Georgeの弟に当たる四男のRafe (Ralph) (No.27) は一五一七年から一五一九年にかけてヤング・チェンバレン、オールド・チェンバレンの役職を務めた後、一五二〇年から一五四〇年まで毎年欠かさず立会人として参加し、その間一五二四―一五二五年にかけてはオルダマンになり、順当にギルドの指導的立場への階段を上っていたことが分かる。このRafe Carreの働きや、一家から三人の人間がギルドに参加を続けていたことなどから、Carre家

がほかのジェントリ層などに比べ、積極的にギルドに関わろうとした姿勢がみてとれるのではないだろうか。また、聖デニス教会にはGeorgeやRobertをはじめとしてCarre家の人々の墓や祈念碑が多く作られた。George Carreの墓は身廊に作られ、内陣には真鍮の祈念碑があり、大理石製の立板にはGeorgeと妻Annaの像が描かれていたという。身廊東端のRobert Carreの祈念碑にはRobertおよび、妻Elizabeth、息子や娘たちの家柄や嫁ぎ先について詳細に記されている⁽⁷⁰⁾。以上のことから、現在も町の通りにその名を残すCarre家がスリーフォードに定着し町の有力者としての信頼を得る上で、町の教区ギルドであるトリニティ・ギルドに積極的に参加することを重要視したことが読みとれる。それと同時に、教区教会に人々の目をひくような祈念碑を作ること、その威光を示そうとしたのではないだろうか。

おわりに

スリーフォードにおけるホーリー・トリニティ・ギルドとは

以上、従来の量的、経済史的な分析手法では史料として利用することが難しいと思われるトリニティ・ギルドの会計簿について、史料論的考察を行った上で、特に会計簿に登場する人名に注目し分析を試みた。それは同時に、ギルドの経済活動についての記録とされていた会計簿の、史料としての新たな価値を示すことでもある。ここではまとめに代えてトリニティ・ギルドがスリーフォードの人々にとってどのような存在であったのかを考察したい。

ケンブリッジシャの農村地帯のギルドについて研究書をまとめたベインブリッジは、荘園制度の崩壊により、地方行政機構の穴を埋めるような役割を教区ギルドが果たしていたこともあると述べており、その例として、ケンブリッジシャ西端に位置する小さな市場都市ガムリンゲイ(Gamlingay)を挙げている。ベインブリッジによれば、ガムリンゲイはオックスフォードのMerton Collegeを領主としていたが、その領主が不在であったために町の教区ギルドであるホーリー・

トリニティ・ギルドが地域での領主に代わるような地位を獲得しえたという。このギルド自体の史料は残っていないものの、マナ史料や遺言書史料によると、ギルドが多くの財産と、ヨーマン家系の有力なパトロネッジを持っていたことが明らかであり、全体としてガムリンゲイのホーリー・トリニティ・ギルドは非公式な地方統治機構の役割を担っていたのではないかとベインブリッジは主張している⁽⁷¹⁾。

このガムリンゲイとスリーフォードは、地方の小さな商業都市であること、領主が不在であること（スリーフォードの場合はリンカン司教）、経済的に豊かなギルドが存在し、地元の有力量者（スリーフォードの場合は特にCare家）との結びつきが強い、といった点で共通点が多いと思われる。

ベインブリッジはその「公式／非公式 (official/unofficial)」という用語に関して、宗教改革以降、教区が世俗の地方行政単位へと移行していくことを前提とした上で、教区を「公式」とし、中世におけるギルドを「非公式」としている。中世においてのギルドの非公式な社会的機能は、ギルド組織が崩壊する宗教改革後に公式な地方統治機構としての教区に一体化していくという議論がベインブリッジにより展開されているわけであるが、宗教改革前後の教区とギルドの展開に関しては、教区や地域の史料に乏しいスリーフォードの例から明確に実証することは困難である。しかし、ロツサーによって実証研究がなされたウェストミンスターのように、都市的共同体でありながらも、公的な自治組織を持たない場合に、特定の職種などに限定されず人々が会する教区ギルドが、「非公式」ではあるものの、住民たちにとって様々な都市的問題を解決するための場を提供していたという可能性は、ガムリンゲイやスリーフォードについても考えられるのではない⁽⁷²⁾か。

また、都市内部に多くの教区が存在する大都市とは異なり、スリーフォードのように町という地理的・行政的単位と、教区という宗教的単位がほぼ一致するような小都市における教区ギルドの存在というのも興味深いポイントである。

リンカンシャの州都リンカンのSt. Michael on the hill教区に一二五〇年に創設されたコーパス・クリステイ・ギルドは

ありふれた普通の人々 (folks of common and middling rank) によって創設されたとし、市長やベイリフといった社会的上層の人々の入会を制限することを規約に明記した⁽⁷³⁾。入会を禁止しているわけではないにせよ、そこにはリンカンの都市内部のヒエラルヒーが教区ギルドを組織するにあたって反映されていると言える。このように、都市内で教区が隣接しあい、多数の教区ギルドが存在する場合には、ギルドが会員を選別したり、逆に市民が多くのギルドと関わりを持つことが可能な状況が生じると考えられる。

しかし、スリーフォードのような町と教区の領域が一致し、教区ギルドが数多く存在しない小都市においては、大都市と異なる教区ギルドの存在が考えられる。会計簿の分析からトリニティ・ギルドには地元の有力者であるCalle家、同職ギルドの親方層、地域のジェントリ、教区教会の聖職者をはじめ、スリーフォードの様々な男女が世代を超えて関わりを持っていたことがわかった。そういった状況で、ベインブリッジやロッサーによって議論されたような住民の会合の場としての機能をスリーフォードにおいてトリニティ・ギルドが果たしていた可能性は大いに考えられることである。それと同時に、スリーフォードの住民にとって、町の有力な教区ギルドという存在は、アイデンティティの数少ない拠り所だったのではないだろうか。だからこそ、世襲的なギルドへの参加が見られ、Calle家はスリーフォードでの地盤を築くためにトリニティ・ギルドに積極的に関わろうとし、スリーフォードという都市の規模に比べて豊かな財産がこのギルドに蓄積されたのだと考えられる。これらのことは、大規模な都市の教区ギルドとは異なる、地方の小都市における教区ギルドの組織としての包括度の高さや、地域住民にたいする求心力の大きさを示していると思われる。更に、長期間立会人を務めることで教区ギルドを運営していた人々の存在は、彼らが教区ギルド内のみならずスリーフォードの都市内においても(そして教区ギルドの解散後も)影響力を持っていた可能性を示唆するのではないだろうか。

注

- (1) 一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての研究では、経済史、政治史の側からの商業や都市、地方自治との関わりといった社会性の重視と、教会史の側からの宗教組織としての性質の重視という、二項対立的なアプローチが主であった。J. Toulmin-Smith ed., *English Gilds*, Early English Text Society, London, 1870, rep.1963; L. Brentano, 'On the History and Development of Gilds and the Origine of Trade Unions', in J. Toulmin-Smith, *op.cit.*, pp.clxv-cxcix; H. F. Westlake, *The Parish Gilds of Medieval England*, London, 1919.
- (2) C. Phythian- Adams, *The Desolation of a City: Coventry and the Urban Crisis of Late Middle Ages*, Cambridge, 1979
 C・フイスイアン＝アダムスの研究は主に酒田利夫「イングランド中世後期都市共同体論—C・フイスイアン＝アダムスのコヴェントリーに関する研究—」（『比較都市史研究』三—二、昭和五九年、一一—三三頁）において紹介されている。M. Rubin, *Corpus Christi: The Eucharist in Late Medieval Culture*, Cambridge, 1991; Idem, *Charity and Community in Medieval Cambridge*, Cambridge, 1987, pp.237-264; S. Reynolds, *Kingdoms and Communities in Western Europe 900-1300*, Oxford, 1984.
- (3) G. Rosser, 'The Essence of Medieval Urban Communities: The Vill of Westminster, 1200-1540', in

R.Holt & G.Rosser eds, *The Medieval Town : A Reader in English Urban History 1200-1540*, New York, 1990, pp.216-237
 ロッサーのウェストミンスター研究については吉武憲司氏による紹介が『史学』六一—一・二、一九九一年、一九七—二〇〇頁にある。

- (4) ウェストミンスターの有力な教区ギルドである聖マリヤ被昇天ギルドの役員たちは、ギルド役員として地域社会の主導的立場にあると同時に、領主裁判法廷の代官の下役として働いていた。そのため、ギルドは次第に地域の行政的側面に関与するようになり、都市参事会に代わるような役割を果たすようになっていたのである。Rosser, *op.cit.*, pp.227-237
- (5) Rosser, 'Communities of Parish and Guild in the Late Middle Ages', in S.J.Wright ed., *Parish, Church and People: Local Studies in Lay Religion 1350-1750*, London, 1988, pp. 29-55; Idem, 'Parochial Conformity and Voluntary Religion in Later Medieval England', *Transactions of the Royal Historical Society* 6-1, 1991, pp. 173-89; Idem, 'Going to the Fraternity Feast: Commensality and Social Relations in Late Medieval England', *Journal of British Studies* 33, 1994, pp. 430-446 (以下「Fraternity Feast」略); Idem, 'Crafts, Guilds and the Negotiation of Work in the Medieval Town', *Past & Present* 154, 1997, pp.3-31 また、一九九四年までのロッサーによる研究

を都市史研究の視点からまとめたものに、三好洋子「イギリス中世都市研究の一視角」(『比較都市史研究』一五一、一九九六年、三五―四九頁)がある。

- (9) V.A.Bainbridge, *Gilds in the Medieval Countryside: Social and Religious Change in Cambridgeshire, c. 1350-1558*, Woodbridge, 1996; David J.F. Crouch, *Piety, Fraternity, and Power: Religious Gilds in Late Medieval Yorkshire, 1389-1547*, York, 2000; K. Farnhill, *Gilds and the Parish Community in Late Medieval East Anglia c. 1470-1550*, York, 2001 (以下、*Gilds and Parish*と略す。)一九九〇年代から現在に至る教区ギルド研究に関する主要な研究動向については、駒沢大学法学部北野かほる氏による「中世後期イングランドの教区とギルド」(『教会から見た中世ヨーロッパの政治社会』平成二二―一四年度文部科学省科学研究費補助金・基盤研究(B)(一)課題番号二二四一〇〇九七研究代表者甚野尚志東京大学大学院総合文化研究科助教授)、二〇―二五頁が有益である。また、現在も地域ごとの教区、コミュニティといったテーマはロンドン大学Institute of Historical Researchの学位論文題目リストに多く見られる。

- (7) Christopher Dyer, 'Small Places with Large Consequences: The Importance of Small Towns in England, 1000-1540', *Historical Research* lxxv, 2002, pp.1-24

- (8) 日本においては、阿部謹也氏による北ドイツ都市ハン

ブルグでのフラタニティ活動を扱った論文が初めての本格的な研究とされる。特にイングランドに関しては、坂巻清氏によるクラフト・ギルドと教区ギルドとの関連を重視した研究、市川実穂氏によるノリッジの教区ギルドと都市政治との関わりについての研究などが挙げられる。最近では宗教改革史研究の側から山本信太郎氏、唐澤達之氏による論考がある。阿部謹也「中世ドイツのfraternitas exulum」(『一橋論叢』八十一―三、一九七九年)(一〇二)―(一一)頁、坂巻清「クラフト・ギルドとフラタニティーロンドンにおける展開」(『比較都市史研究』四―二、一九八五年)一五―三三頁、同「イギリス・ギルド崩壊史の研究」(有斐閣、一九八七年)、同「中世末期ロンドンの教区フラタニティ」(比較都市史研究会編『都市と共同体』下、名著出版会、一九九一年)二五七―二八一頁、市川実穂「イギリス中世後期における宗教ギルドと都市―ノリッジの聖ジョージ・ギルド」(『お茶の水史学』三四、一九九〇年)三七―六〇頁、同「一五世紀イングランドにおける小都市とギルド」(『人間文化研究年報(お茶の水女子大学)』一七、一九九三年)一一―二〇頁、山本信太郎「一六世紀ラドローにおける都市と教区―イングランド宗教改革研究史の前提として―」(『史苑』六十二―一、二〇〇一年、三十一―四十九頁)、唐澤達之「イングランド近世都市におけるフラタニティの変容―十六世紀後半ノリッジの聖ジョージ・カンパニー―」(イギリス都市・農村共同研究会、

東北大学経済史・経営史研究編『イギリス都市史研究―都市と地域―』、日本経済評論社、二〇〇四年）一四七―一六九頁。

- (9) J. Toulmin-Smith, *op.cit.*; 一三八九年のギルド調査についてはJ. Gerchow, 'Gilds and Fourteenth-century Bureaucracy: The Case of 1388-9', *Nottingham Medieval Studies* XL, 1996, pp.109-148参照。
- (10) Gerchow, *op.cit.*, p.117 オックスフォード大学ボードリアン図書館所蔵の四件の記録はいずれもロンドンのギルドについてである。この史料については、Caroline M. Barron & Laura Wright, 'The London Middle English Guild Certificates of 1388-9', *Nottingham Medieval Studies* XXXIX, 1995, pp.108-145 を参照。
- (11) 一五四七年の寄進礼拝堂解散法によって、教区ギルドは解散せられることとなる。大部分の調査は一五四六年に実施された。Crouch, *op.cit.*, p.236-7; W.Page ed., *The Certificates of the Commissioners Appointed to Survey the Chantries, Guilds, Hospitals, etc. in the County of York*, 2 vols., Surtees Society 91&92, 1894-5, p.xi.
- (12) Page, *op.cit.*, p.xiii やまろ K.Farnhill, 'Religious Policy and Parish 'Conformity': Cratfield's Lands in the Sixteenth Century', in Katherine L. French, Gary G. Gibbs & Beat A. Kumin eds, *The Parish in English Life 1400-1600*, Manchester, 1997, p.218.

- (13) Farnhill, *Guilds and Parish*, pp.27-8.
- (14) マナ史料についてはFarnhill, *Guilds and Parish*, p.p.28-9; 例えばイングランド全土で約九五〇〇の教区が存在したなかで現存する一五四七年以前の教区委員会計簿は約一〇〇〇程度に過ぎない。Katharine L. French, *The People of the Parish: Community Life in a Late Medieval English Diocese*, Philadelphia, 2001, pp.7, 47, まだ、本稿で扱うスリーフオードにおいて教区簿冊は一五七五年から開始されており、中世の教区委員会計簿などは残存していない。E. Trollope, *Sleaford and the Wapentakes of Flaxwell and Aswardhurn in the County of Lincoln*, London, rep. Sleaford, 1872, rep.1999, p.145.
- (15) 史料説明の原文は以下の通り、〈Manuscript Description 28533〉Accounts of the Alderman and Chamberlains of the Guild of the Holy Trinity of New Sleaford, co. Lincoln; 1477-1545. See G. Oliver's "History of the Holy Trinity Guild at Sleaford", 1857, p.50 At the end f.17b are a few receipts of poor rates, etc. 1585, 1613. Paper. Folio. まだ、今回はマイクロフイルムの形で入手し用いた。
- (16) 未製本であるため正確には「会計簿」と言えないが、本稿では便宜上会計簿とする。まだ、フオリオはf、フオリオ表はr、フオリオ裏はvと略記する。
- (17) Dorothy Owen, 'The Development of Historical

Studies in Lincolnshire', in Christopher Sturman ed., *Some Historians of Lincolnshire*, Gainsborough, 1992, p.9.

- (18) F. J. Furnivall 以下は、W. Benzie, *Dr. Furnivall, Oklahoma*, 1983を参照。

- (19) Yerburchの業績はGeorge Oliver 名義で出版された。
George Oliver, *History of the Holy Trinity Guild at Sleaford*, Lincoln, 1837。また、一九世紀後半に刊行されたスリーフォードの地域史研究においても、会計簿はその初年度分が引用されているに過ぎない。Edward Trollope, *Sleaford and the Wapentakes of Flaxwell and Aswardhurn in the County of Lincoln*, London, rep. Sleaford, 1872, rep. 1939.

- (20) Dorothy M. Owen, *Church and Society in Medieval Lincolnshire*, Lincoln, 1971, pp.128,130 (以下、*Church and Society*と略す。)

- (21) 該当会計簿を考察するにあたって、写本史料の全文を活字に転写する作業を行なったが、本稿では議論に関係する箇所のみを抜粋し史料として掲載した。【史料1】は会計簿の初年度分、【史料2】はオルダマンからオルダマンへの財産の受け渡しのみを記した最も簡単な書式の例として、【史料3】は後述するRobert Applebyの出来事に関する会計年度分、【史料4】は会計簿の後半に特徴的に見られる書式の例として挙げた。また、写本史料の転写に関する凡例は以下の通りである。同時代の記録のみを転写し、後世の書き込み等は省いた。フォリオ番号および年号は筆

者が便宜上付したものである。綴りは原則として原文に従うが、ソーンはEに改め、F, E, Vについては現代綴りに従い、大文字については文頭および語頭の場合、大文字とした。aforeのように原文で二語に分割して記述されている語は、現代綴りに従い一語として転写した。また、ラテン語部分の省略は展開し、英語部分についてもitem, madeという語については省略を展開した。ローマ数字はアラビア数字に改め、通貨単位はm, s, dと表記した。また、改行についても原文に従い、行数を付した。会計項目と金額を結ぶ線は原文において線がひかれている場合のみ表記した。^ ^は原文において二重線などによって削除されている部分、...は判読不可能な部分、—は編集上の挿入を示す。

- (22) Lucy Toulmin-Smith ed., *The Itinerary of John Leland in or about the Years 1535-1543, Parts I to III, vol. I*, Carbondale, 1964, p.26.

- (23) *Dictionary of National Biography on CD-ROM, Version 1.1*, Oxford, 1996。このCD-ROM版には、一八八五年から一九〇一年にかけて出版されたSir Leslie Stephen & Sir Sidney Lee eds, *The Dictionary of National Biography*, vols. i-xxii。および、その後十年ごとに加筆されたものが収録されている。

- (24) スリーフォードはthe Wapentakes of Flaxwell and Aswardhurnの中心地であり、ワペンテイク・コートが開

かれた。ワグヘテイクとは南部諸州のくハトリットに相当する行政単位である。David I. A. Steel, *A Lincolnshire Village: the Parish of Corby Glen in its Historical Context*, London, 1979, p.6.

(25) J.G. Pounds, *The Medieval Castle in England and Wales: A Social and Political History*, Cambridge, 1990, pp.53, 142, 264-5 ;Graham Platts, *Land and People in Medieval Lincolnshire*, Lincoln, 1985, p.193.

(26) 一〇七二年にノルマン人司教Remigiusのリハカン大聖堂建設に伴い、ウィリアム一世からスリーフオードをはじめとした大規模な荘園を与えられた。D. Owen, *Church and Society*, p.37.

(27) S. Pawley, 'Medieval Old Sleaford', in Sheila M. Elsdon ed., *Old Sleaford Revealed: A Lincolnshire Settlement in Iron Age, Roman, Saxon and Medieval Times: Excavations 1882-1995*, Oxford, 1997, pp.68-69.

(28) S. H. Rigby, *Medieval Grimsby; Growth & Decline*, Hull, 1993, pp.35-36.

(29) G. Oliver, *op.cit.*, p.58およびW.H. Hosford, 'The Manor of Sleaford in the Thirteenth Century', *Nottingham Medieval Studies XII*, 1968, p.21.

(30) また、スリーフオードは中世においてニュー・スリーフオードとも呼ばれ、その東にはより古い起源を持つオールルド・スリーフオードが存在した。オールルド・スリーフオ

ードとニュー・スリーフオードは教区も領主も異なり、中世後期には既にその中心はニュー・スリーフオードに移っていた。Nikolaus Pevsner & John Harris, *Lincolnshire*, London, 1964, rep.1990, p.649 本稿ではスリーフオードはニュー・スリーフオードを指すものとして用いる。

(31) John Betjeman ed., *Collins Guide to English Parish Churches including the Isle of Man*, London, 1958, p.246; Penny Hebgin-Barnes, *The Medieval Stained Glass of the County of Lincolnshire*, Oxford, 1996, p. 257 聖マリス教会は1853年に修復されている。

(32) E. Trollope, *op.cit.*, p.141.

(33) *Ibid.*, pp.152-153.

(34) *Ibid.*, pp.105, 127-128, 131-132.

(35) 岡崎敦「西洋中世史研究と史料論」(『創文』四五六号、二〇〇三年、一―四頁) 以下、史料論の論点に関しては岡崎氏の論文を参考にした。

(36) また、f.17.vにはギルドの会計記録に続く余白部分に、「一五八五年および一六一三年の救貧税に関するメモが書き込まれており、このことから同時代に残された記録であると考えられる。

(37) ソウル・スコット (soul-scot) については、本稿十六―十七頁参照。

(38) R. F. B. Hodgkinson ed., *The Account Books of the Gilds of St. George and St. Mary in the Church of St. Peter*

Nottingham, Nottingham, 1939 この史料集は私家版として出版されており、一四五九年から一五四六年までの聖ジョージ・ギルドの会計簿および、一五一五年から一五四〇年ごろまでの聖マリア・ギルドの会計簿が収録されている。しかし、もとはラテン語で書かれていた史料を英訳しているながら、写本史料が現在では行方不明であるために、原文との照合が困難なため本稿では本格的な分析の対象とはしなかった。しかし、書式に関してはスリーフォードのトリニティ・ギルドとの違いが見られるために、限定的に参考にした。

(39) Stephen E. Doree ed., *Early Churchwardens' Accounts of Bishops Stortford 1431-1558*, Cambridge, 1994 p.xiv.

(40) ff.1r-1v.

(41) デイリジェ (Dirige) とは、晩課と徹夜課 (朝課) と賛課によつて構成される死者の聖務日課のうち徹夜課 (朝課) を指すものである。主に葬送の場合に行なわれるものだが、寄進礼拝堂においては聖務日課として日々唱えられることもあった。J・ハーパー著 (佐々木勉・那須輝彦訳) 『中世キリスト教の典礼と音楽』 (教文館、二〇〇〇年、一六二—一六七頁) ここでは二〇ペンスという金額から考えて、葬儀に伴う支出ではないか。

(42) ff.5r-7r.

(43) 例として、ノッティンガムの聖ジョージ・ギルドの会計簿一年間分を省略せずに全て訳出して引用する。

「ノッティンガムの聖ピーター教会にある聖ジョージ・ギルドのチェンバレンであるThomas Bridgeford およびWilliam Wayeの会計簿。オルダマンはJohn Huntであり、コンクエスト後、第四代目のエドワード王の治世第四年 (一四六四年) の聖ジョージの祝日から翌年の同祝日まで一年間分。

上記のチェンバレンは前述のJohn Huntによつて、前述のギルドの金庫から彼らに渡された£1416s 10dについて報告した。その£1416s 10dは昨年度のチェンバレンであるWilliam Joly とWilliam ParkynによつてJohn Huntへと渡されたものである。同じWilliamとWilliamの会計簿に記された次の手続きは次のフォリオに、等々。

その合計 £1416s 10d

そして会計簿の作成にあたって上述のWilliam Joly とWilliam Parkynによつて数人の会員の借金のため6s 6dが同様に彼らに渡された。上述のWilliam Joly とWilliam Parkynの時も、その前の会計以降に、上述の会員から受け取った。

その合計 6s 6d

そして20dをAlice Platters の遺言書の執行人からAliceの遺贈として。12dをJohn Whitgreveの遺言書の執行人からJohnの遺贈として受け取った。そして、2sを今年一年間の聖ジョージの小箱 (棺?) への献金として。6s 8dをギルドの用途のために集められた穀物の今年の売り上げか

ら。£66s9dをこの会計簿の期間に、ギルドの兄弟姉妹により、この会計簿で生じ、確認された項目から。

その合計 £617s1d 全体の合計 £22 5d

それについて、上記のチェンバレンは100sをギルドのチャレンであるJohn Cooに今年の俸給として支払うことを認めるよう願うものである。そして、2sはJohn にミサのためのパンとワインの代金として支払われた。6s8dはJohn Clerk に今年おこなわれたミサと“le Salve”のために。3s 4dは教区小役人のStephen Westに彼の今年の職務のために。11s 4dはギルドの職杖の壊れた銀の上を整形する目的でJohn Squyerによって支払われた。そして10dは他の必要な支出のために。

その合計 £68s8d

上述の支払いの全ての合計は£68s8dとなり、彼らは£1513s9dを所有する。そのうち、12dがあることの報酬としてWilliam Jolyに与えられ、小修道院に大ホールの修繕のため6s8dを。したがって、最終的には£156s1dが残る。そして、Robert Yaleにこの会計簿の作成のため20dを支払い、残りは£154s5dとなる。」Hodkinson ed., *op.cit.*, pp.21-22.

(44) もちろん、これは一四七七年度に代表されるような、ある程度の詳細な収支項目が記載されている年についてであって、一四八七年から一四九七年のような受け渡しのみの記録は、「収入と支出を算出して、使途を記録する」と

いう、現在我々が考えるような会計簿の機能とは全くかけ離れており、「計算が合わない」以前の問題である。

(45) ギルド会計簿ではなく教区委員会会計簿を用いているが、同様に会計簿についての様式論的な利用方法に基く従来の経済史的分析を批判したものにバージェスによる論文Clive Burgess, 'Pre-Reformation Churchwardens', *Accounts and Parish Government: Lessons from London and Bristol*, *EHR*, cxii, 472, 2002 がある。この中でバージェスは、これまで教区の経済活動を完全に記録したものとして安易に使われてきた教区委員会会計簿に関する、画期的な史料論的考察を試みている。経済史的視点では量的な分析が行われることの多かった教区委員会会計簿を3つのサンプルに限定し、綿密な分析を行うことによって、教区委員会会計簿は宗教改革以前の教区生活を完全に表す史料ではなく、実際に活用されていたオリジナルの会計簿を整理・要約したものであることが多いことを指摘した。さらには教区が任期制の教区委員によってではなく、マスターと呼ばれるような教区委員経験者たちによって実際にはコントロールされていたことを明らかにしている。会計簿に書かれていることがその教区の経済状態の全てであるかのように安易に史料として用いることの危険性を示し、また、要約版とオリジナルの会計簿と比較することで教区委員の役割が限定的なものでしかなかったことを明らかにした点でバージェスの議論はたいへん重要である。しかし、不十分な

会計簿しかない場合に、いかにその会計簿を用いるのか、といった疑問に対しての答えはきちんと提示されていないと思われる。また、この後発表されたバージェスの最新論文は C. Burgess, 'London Parishoners in Times of Change: St Andrew Hubbard, Eastcheap, c.1450-1570' *Journal of Ecclesiastical History* 53, 2002 であるが、この論文においては主に遺言書史料が用いられている。

(46) 一四八二―三年と一四八四―五年の記録の間はフォリオ一枚分が白紙になっている。混乱が起きて会計簿の記載が一年分抜けてしまったとも考えられる。 f4r.

(47) Curwin は一四七七―九年のオルダマンも務めた経歴があり、その時のチェンバレンが Appleby であったことから、この証書が一四七七―九年当時に作成されたのではないかという推測も考え得る。しかし、Appleby がオルダマンを務めてから問題が生じたことや、該当会計簿においては次年度のオルダマンを明記する習慣が見られることを考え合わせて、この証書は一四八三年以降に作成されたとみなすことが妥当と思われる。

(48) f5r.

(49) Appleby がギルド会員からの信頼を失うような事態を起こしたのかどうかは定かではないが、Appleby と同時期にギルド役員を務めた人々は、その後も再度役員になったり、立会人になったりしている一方で、Appleby に関してはこの一件を最後に会計簿に名前が載ることはなくなっ

てる。

(50) f13v.

(51) M.T. Clanchy, *From Memory to Written Record: England 1066-1307*, Oxford, 1979.

(52) E. Trollope, *op.cit.*, pp.105-106.

(53) ff. 1v- 2v; 3v; 8v. 「五ポンド六シリング八ペンス」 「六ポンド」という金額は中世後期の礼拝堂付きの聖職者への報酬として一般的なものであり、十五世紀後半には六ポンドになる場合も多かったという。 C. Burgess, 'Strategies for Eternity: Perpetual Chantry Foundation in Late Medieval Bristol', in Christopher Harper-Bill ed, *Religious Belief and Ecclesiastical Careers in Late Medieval England. Proceedings of the Conference held at Strawberry Hill, Woodbridge, 1991*, p.3.

(54) アングロ・サクソンの法では、教会の維持・管理はその教会から霊的サービスを受ける人々の義務であり、その内容としては毎年定期的に支払われる 'plough-scot' や、埋葬に際しての 'church-scot', 'soul-scot', ロウソク代としての 'wax-scot' などが規定されていたという。 Owen, *Church and Society*, pp.2-3, 16-17 以下の「ソウル・スコット」という言葉は、埋葬などに際して教区教会に支払われる場合とは違った意味合いで用いられていると言える。しかし、教区ギルドが会員にとっては現世における相互扶助的役割だけでなく、執り成しのための慰霊ミサを行うことに代表

されるような、霊的意味での相互扶助的役割を果たしていたことから、このようにギルドの会費や入会金を「ソウル・スコット」と表わすようになったとも考えられる。

(55) ff.1 r - 2 r, 10r.

(56) ギルドの祝宴、その社会的な役割については、Rosser, 'Fraternity Feast'を参照。

(57) f.3v, f.12r, f.15v.

(58) Owen, *Church and Society*, pp.111-112.

(59) ff.1v, 2r, 3v.

(60) f.17 r.

(61) 会計簿に登場する人物、計一二〇名について、その名前、オルダマンおよびチェンバレンの就任期間、立会人として記録されている年、マスターという敬称が記録された年、その他の記録のそれぞれの項目をまとめたものが、表二「会計簿に登場する人物リスト」である。

(62) この他に、十年以上にわたって立会人として記録されている人物は以下の通り。Richard Barker(No.10), Robert Bateson(No.15), George Carre (No. 26), Robert Carre (No.28), William Clerk(No.32), Thomas Folkyngham (No.45), John Folkyngham (No.46), John Godfrey (No.54), Thomas Gybe (No. 60), William Jeffrey (No.69), William Lawson (No.71), Thomas Leke (No.73) 表二参照。

(63) R. F. B. Hodgkinson ed., *op. cit.*

(64) Bate, Bolur, Byb, Carre, Clerk, Fescher, Folkyngham,

Franke, Gybb, Lake, Pynder, Stonham, Tolly, Wecham の十四例。John Fescher (No.42) は一人だが一四九六年にはオルダマンを務め、その後一五四五年まで登場していることから考えて、同一人物と考えるのは不自然であり、おそらく同姓同名の父子・親類であろうと推測した。また、Thomas Folkyngham に関しても、一五〇二年に立会人になっている人物と一五三七年以降立会人になっている人物は同一人物ではないと考えられ、同様に同姓同名の父子・親類ともの可能性が大きい。以上のことを考えると、会計簿に記録された人名の総計は一二〇名ではなく、一二二名ということになる。表二参照。

(65) 他に、master Banyster (No.9)、master Sampall (No.89) また、Carre 家、Folkyngham 家、Leke 家のようなジェントリ層には敬称としてマスターが用いられている。

(66) 新井由紀夫「十五世紀イン格蘭ドにおけるジェントリとフラタニティ」(『西洋史研究』新輯十九、一九九〇年) 四二頁および註五二。

(67) Cranwell はスリーフォードの北方に位置する地名でもある。J. S. Cranwell の聖アンドリュー教会、内陣の東窓にはCranwell家の紋章がある。Penny Hebgin-Barnes, *op. cit.*, p.74 Carre家については本稿八一九頁参照。またジェントリではないと思われるが、William Pynder (No.84) は三度もオルダマンになるなどギルドへの積極的な参加が見られる人物であり、Thomas Riggsやジェントルマ

ンの妻Aliceの寡婦産譲渡記録からは、PynderがFriskneyという海沿いの土地に牧草地四エーカーを保有していたことがわかる。*Inquisitions Post Mortem 1504-1509*, p.301しかし、スリーフォードの郊外であるオールド・スリーフォードの領主であるHassey家は会計簿に全く登場しない。これは、Hassey家が独自にオールド・スリーフォードの教区教会に永代寄進礼拝堂と礼拝堂付き司祭を所有していたことで、スリーフォードの教区ギルドへの関心が薄かったためと推測される。一四八四年三月三日付けで、寄進礼拝堂の創設および、聖職者の維持のための土地を死手に譲渡するためのライセンスが与えられている。*Calendar of the Patent Rolls 1476-1485*, p.385.

(68) “Robe Bate of Wyllyfforg” とあり、Wilsfordを指しているのではないかと考えられる。f.1v.

(69) GeorgeやRobertのような家長は名望家的なギルドとの関わりを、四男Rateは都市商人としての実地的なギルドとの関わりを選択していたことが推察される。

(70) Trollope, *op. cit.*, pp.156-158.

(71) Bainbridge, *op. cit.*, p.126. ベインブリッジの研究における公式／非公式という言葉の用法や、その議論の問題点などについては駒沢大学の北野かほる先生にご指導いただいた。

(72) ロッサーの議論における「非公式」とは、制度的な都市自治組織ではないという意味で用いられたものである。

ロッサーのウェストミンスター研究については本稿二頁参照。
(73) Sir Francis Hill, *Medieval Lincoln*, Cambridge, 1948, rep.1965, p.298.

(お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人文専攻歴史文学博士前期課程 平成十六年三月修了、国立国会図書館勤務)

表1 ホーリー・トリニティ・ギルド役員名簿

	<alderman>	<chamberlains>	
-1477	John Swynshed	William Pynder	Richard Frank
1477-9	William Curwin	Robert Appilby	William Frank
1479-80	William Curwin	Robert Prentis	William Frank
1480-1	Robert Prentis	William Frank	John Bolur
1481-2	William Pynder	John Bolur	Richard Wecham
1482-3	Robert Appilby	Richard Wecham	Robert Betesune
1483-5	John Gylbert	William Gymson	John Stonham
1385-6	William Curwin	John Stonham	William Wakefelds
1486-7	Richard Wecham	William ffewler	Robert Bato
1487-9	Robert Beteson	Robert Heyneson	Robert Bate
1489-90	William Fewlar	Robert Heyneson	John Feschar
1490-1	William Pynder	John Feschar	Robert Calby
1491-2	Richard Frank	Robert Calby	William Dobson
1492-3	Robert Heyneson	William Dobson	John Wryght
1493-4	Robert Bate	John Wryght	Robert Gybbe
1494-5	William Fewlar	Robert Gybbe	John Maygand
1495-6	John Wryght	John Maygand	John Robson
1496-7	John Feschar	John Robson	Robert Goldysbrugh
1497-8	Robert Gybbe	Robert Goldysbrugh	William Yates
1498-9	John Yasand	William Yates	William Tolly
1499-1500	Robert Bateson	William Tolly	Thomas Byb
1500-1	Richard Wecham	Thomas Byb	John Smith
1501-2	William Fewrar	John Smith	William Jeffrey
1502-3	William Pynder	William Jeffrey	Thomas Codlyng
1503-4	Thomas Byb	Thomas Codlyng	John Japson
1504-5	Robert Hayneson	John Japson	John Bate
1505-6	William Tolly	John Bate	John Wecham
1506-7	John Rande	John Wecham	William Folkyngham
		<old chamberlain>	<young chamberlain>
1507-8	William Clerk	Robert Folkyngham	Robert Gim
1508-9	Thomas Codlyng	Robert Gim	Richard Madsay
1509-10	Thomas Codlyng?	Richard Madsay	—
1510-1	John Japson	Antony Byrde	Richard Walcot

1511-2	John Bate	John Dixson	—
1512-3	Robert Tolly	John Dixson	Thomas Smith
1513-4	Robert Gim	—	—
1514-5	Rchard Madsay	Thomas Smith	Thomas Gybe
1515-6	John Dixson	Thomas Gybe	Robert Bolar
1516-7	John Fescher	Robert Bolar	Richard Rose
1517-8	Robert Gybe	Richard Rose	Rafe Carre
1518-9	John Rand	Rafe Carre	Robert Pynder
1519-20	Robert Bolar	Robert Pynder	John Gray
1520-1	William Clerk	John Gray	Henry Stoylle
1521-2	Thomas Gybe	Henry Stoylle	Henry Raynoleson
1522-3	John Wecham	Henry Raynoleson	William Flours
1523-4	Thomas Gybe	William Flours	William Musterdlone
1524-5	Rafe Carre	William Musterdlone	Jomys Clyfton
1525-6	Henry Stoyle	Jomys Clyfton	John Bendalle
1526-7	William Lawson	John Bendalle	Richard Baker
1527-8	Jamys Clyfton	Richard Barker	John Fescher
1528-9	Henry Raynoleson	John Fescher	Thomas Hunchynson
1529-30	John Rande	Thomas Hunchynson	Saundyr Wyllson
1530-1	William Clerk	Saundyr Wyllson	Thomas Belle
1531-2	Robert Bolar	Thomas Belle	Thomas Attwell
1532-3	Richard Barker	Thomas Attwell	Thomas Warmowthe
1533-4	William Flowrys	Thomas Warmowthe	John Tolly
1534-5	William Clerk	John Tolly	Edmond Banbryg
1535-6	Thomas Hunchynson	Edmond Banbryg	Thomas Sandby
1536-7	John Fescher	Thomas Sandby	Richard Cartar
1537-8	Thomas Wormowthe	Richard Cartar	Robert Hodylleston
1538-9	John Bendall	Ranss Wathyll	John Plesand
1539-40	Thomas Sumten	Ranss Wathyll	Thomas Stokbreggh
1540-1	William Mosterlone	Thomas Stokbreggh	Richard Browy
1541-2	Richard Cartar	John Plesand	Robert Tymberland
1544?	Ranss Wathyll	Robert Tymberland	Henry Camoley
その翌年	Crestopher Sclaytone		

表2 会計簿に登場する人物リスト

No.	名前	Alderman	Chamberlain	立会人	Master	その他
1	Abowth, Thomas			1509		
2	Appilby, Robert	1482-3	1477-9			1480,85,6
3	Arnold, John					1483
4	Attwell, Thomas		1531-2(Y),32-3(E)			
5	Balans, William			1521		1512
6	Balard, Thomas			1486		
7	Banbryg, Edmond		1534-5(Y),35-6(E)			
8	Bandell, John	1538-9				
9	Banyster, master			1510,11	1510,11	
10	Barker, Richard	1532-3	1526-7(E),27-8(Y)	1532,34,35,38-45?		
11	Bate, John	1511-2	1504-7	1516,19		
12	Bato, Robert	1493-4	1486-9	1487		1477-9
13	Belle, Thomas		1530-1(Y),31-2(E)			
14	Bendalle, John		1525-6(Y),26-7(E)			
15	Beteson, Robert	1487-9,1499-1500	1482-3	1490,93-96,1501		1502
16	Bolar, Robert	1519-20,31-2	1515-6(Y),16-7(E)	1521,29,30,35,37-42		
17	Bolur, John		1480-2			1508
18	Browy, Richard		1540-1(Y)			
19	Byb, Robert	1497-8				1501,1510,11,12,15
20	Byb, Thomas	1504-5	1499-1502			1510,1515
21	Byrde, Antony		1510-11(E)			
22	B..., John, chaplain					1510
23	Cacby, George					1477-9
24	Calby, Robert		1490-2			
25	Camoley, Henry		-1544?(Y)			
26	Carre, George			1502-4,07,10-17	1507,10-16	
27	Carre, Rafe	1524-5	1517-8(Y),18-9(E)	1520-40		
28	Carre, Robert			1534,41-44?	1542	
29	Cartar, Richard	1541-2	1536-7(Y),37-8(E)	1544?,45?		
30	Chapanon, John					1509
31	Chestray, William					1507
32	Clerk, William	1508-9,20-21,		1518,22,28,32,33		

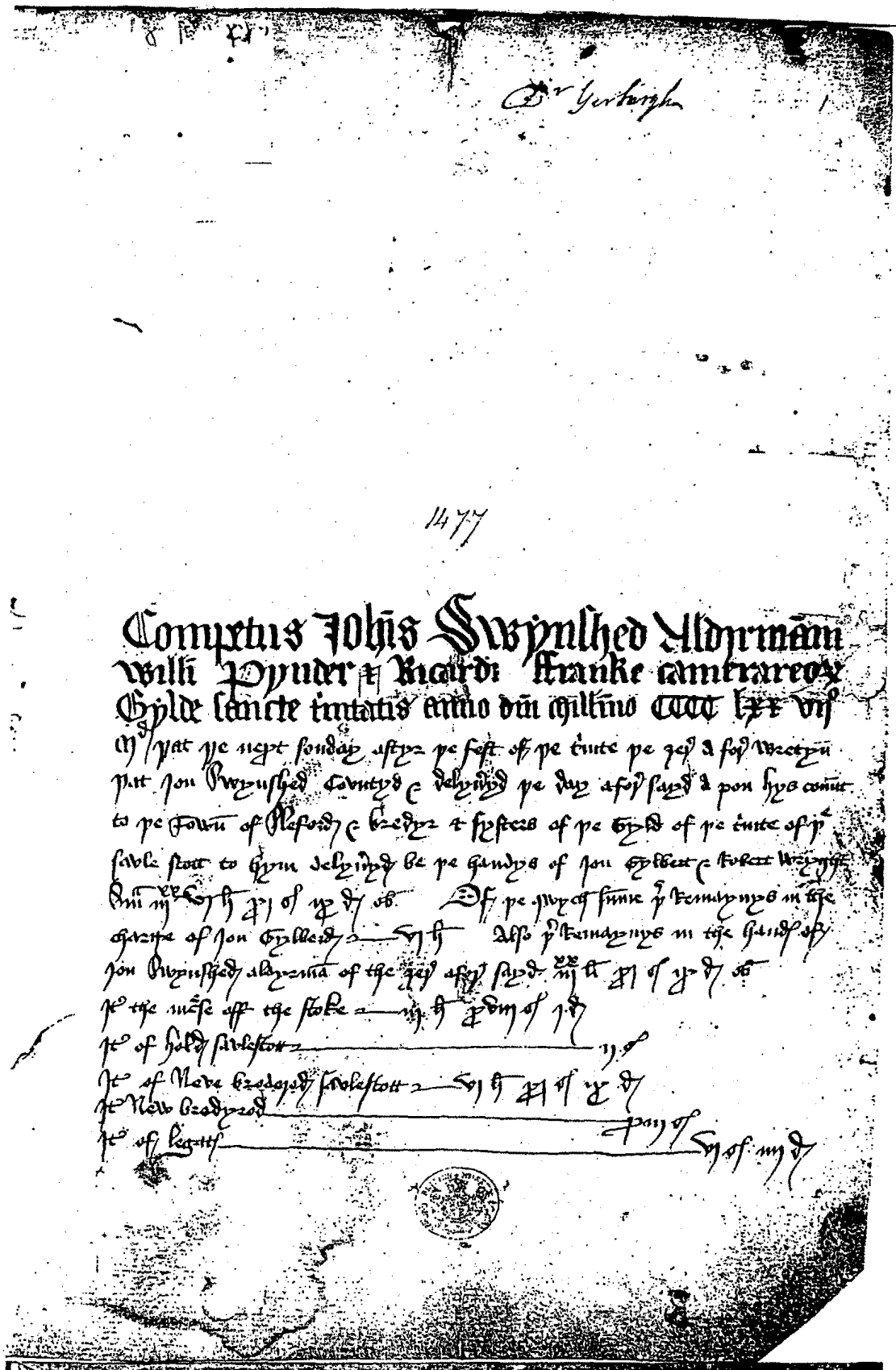
No.	名前	Alderman	Chamberlain	立会人	Master	その他
33	Clerk, William ,the younger	1530-1,34-5		1536		
34	Clyfton, Jomys	1527-8	1524-5(Y),25-6(E)			
35	Codlyng, Thomas	158-10	1503-5			
36	Cornell, Phillip			1526,27,29,31		
37	Cowth, John					1483
38	Cranwell, William				1501	1501
39	Curwin, William	1477-80,85-6				1485,1522,23,26(wife)
40	Dixson, John	1515-6	1511-3(E)			
41	Dobson, William		1491-3			
42	Fescher, John	1496-7,1516-7,36-7	1489-91,1527-8(Y),28-9(E)	1509-16,18,21,44?,45?		
43	Fewlar, William	1489-90,94-5,1502-3	1486-7	1487		
44	Flours, William	1533-4	1522-3(Y),23-4(E)			
45	Folkyngham, Thomas			1502,37-39,41-44?	1537-39,42,44?	
46	Folkyngham, John,gent.			1492,93,98,1501-3,07	1507	
47	Folkyngham, Robert		1508-9(E)	1511,12	1511,12	
48	Folkyngham, William		1507-8			
49	Franke, Richard	1491-2	1477			
50	Franke, William		1477-81			
51	Furgor, William					1501
52	Gim, Robert	1513-4	1508-9(Y),09-10(E)	1521		1514
53	Gloner, Henry			1541		
54	Godfrey, John, vicar			1517,19,20,22-32,34-37		
55	Goldysbrugh, Robert		1496-8			
56	Gray, John		1519-20(Y),20-21(E)			
57	Gregs, John			1516		
58	Gybb, John					1522,23,27
59	Gybbe, Robert	1497-8,1517-8	1493-5	1496,1500,09-12,15,18,19,22		
60	Gybe, Thomas, butcher	1521-2,23-4	1514-5(Y),15-6(E)	1510,31,33	1522,23,27	1527
61	Gylbert, John	1484-5	-1477?	1489		1477,86
62	Gymson, William		1484-5			
63	Halpeny, Richard					1481,83
64	Hellerd, Simond			1533		
65	Heyneson, Robert	1492-3,1505-6	1487-90			

No.	名前	Alderman	Chamberlain	立会人	Master	その他
66	Hodylleston, Robert		1437-8(Y)			1542?
67	Hunhynson, Thomas	1535-6	1528-9(Y),29-30(E)	1532,33,38,39		
68	Japson, John		1504-6	1513,15,16,18		1510
69	Jeffrey, William		1502-4	1509,10,14,25		
70	Lackhouse, Godfery					1585
71	Lawson, William	1526-7		1518,20,21,23-26,28-30		
72	Layke, William			1512		
73	Leke, Thomas,gent.			1490-92,97,98,1500-5	1497	
74	Madsay, Richard	1514-5	1509-10(Y),09-10(E)			
75	Mares, John					1483
76	Masterdlone, William	1540-1	1523-4(Y),24-5(E)	1521		
77	Meygand, John		1494-6	1494,1507		
78	Permard, William			1500,01,04		1499,02,05,
79	Playes, John					1483
80	Plesand, John		1538-9(Y),1541-2(E)			
81	Prentis, Robert	1480-1	1479-80	1489		
82	Pynder, Robert		1518-9(Y),19-20(E)			
83	Pynder, William	1481-2,90-1,1503-4	1477	1487,93-96,1500,01,07,09		
84	Rande,John	1507-8,1518-9,29-30		1510,12,15,18,20,21,26,29,31		1522
85	Reynoleson, Henry	1528-9	1521-22(Y),22-3(E)	1521		
86	Robsonne, John		1495-7	1495		
87	Ronaulodsun, Harre			1539,40,42		
88	Rose, Richard		1516-7(Y),17-8(E)			
89	Sampall, master			1512,13	1512,13	
90	Sandby, Thomas		1535-6(Y),36-7(E)			
91	Sawned, Richard					1483
92	Sclayton, Crestphfer	1545?				
93	Smith, John		1501-3	1514		1503
94	Smith, Thomas, shoemaker		1512-3(Y),14-5(E)			
95	Somper, Thomas					1501
96	Stokbregh, Thomas		1539-40(Y),40-1(E)			
97	Stonham, John		1484-6	1487,89		1492
98	Stonham, Richard			1515-17,19,20		

No.	名前	Alderman	Chamberlain	立会人	Master	その他
99	Stonham, William			1486,91		
100	Stoylle, Henry	1525-6	1520-21(Y),21-22(E)	1523,24		
101	Sumton, Thomas	1539-40				
102	Swynshed, John	1477				
103	Tolly, John		1533-4(Y),34-5(E)			
104	Tolly, Robert	1512-3		1511,15,16,19		1510
105	Tolly, William	1506-7	1498-1500	1489,90		
106	Tymberland, Robert		1541-2(Y),-44?(E)	1545?		
107	Wakefelds, William		1485-6			
108	Walcot, Richard		1510-11(Y)			
109	Walter, William					1508,22,23,26
110	Wardell, William			1533		
111	Warmowthe, Thomas	1537-8	1532-3(Y),33-4(E)	1540,44?		
112	Wathyll, Ranss	1544?	1538-40(E)			
113	Wecham, John	1522-3	1506-8	1504,13-15,17-21,24,25,27,30, 33,34,36,37,44?		1510
114	Wecham, Richard	1486-7,1501-2	1481-3	1487,90		
115	Wryght, John	1495-6	-1477?,1492-4			1477,80
116	Wyllson, Saundyr		1529-30(Y),30-1(E)			
117	Yates, William		1497-9			
118	Yesand, John	1498-9				1508
119	…ehfaray, William			1507		
120	…st, John			1545?		

図1 ホーリー・トリニティ・ギルド会計簿の巻頭

(British Library, MS Add 28533, flr.)



【史料 1】

[1r] [1477]

- 1- Competus Johannis Swynshed Aldjrmanni
 - 2- Willelmi Pynder et Ricardi Franke camerareorum
 - 3- Gylde Sancte Trinitatis anno domoni millesimo cccc lxx vij
 - 4- made that the next Sonday aftyr the fest of the trinite the yere afore wretyn
 - 5- that Jon Swynshed covntyd & delyveryd the day afore sayd apon hys count
 - 6- to the town of Sleford & bredyr & systers of the Gyld of the trinite of the
 - 7- savle scott to hym delyveryd be the handys of Jon Gylbert & Robert Wryght
 - 8- summa £ 66 11s 9d ob Of the qwych summe the remaynys in the
 - 9- charge of Jon Gylberd ----- £6 Also the remaynys in the hands of
 - 10- Jon Swynshed aldyrman of the yere afore sayd £60 11s 9d ob
 - 11- Item the increse off the stoke ----- £3 18s 1d
 - 12- Item of hold savlescott ----- 2s
 - 13- Item of neve broderod savlescott ----- £6 11s 9d
 - 14- Item new brodyrod ----- 13s
 - 15- Item of legats ----- 6s 4d
- [1v]
- 1- Item for malte sold be the chavmerlayns ----- 18s 8d
 - 2- summa totalis £78 0s 3d ob

- 3- Thys ben the parcels in expens don be the sayd aldyerman & hys chavmerlayns
- 4- In feyst payd to the prest £ 5 6s 8d
- 5- Item payd to the dirige ----- 20d
- 6- Item payd to the prest for messe penys for the bredyr dyssesynd that yere ----- 10d
- 7- Item payd to the mynstrels ----- 14d
- 8- Item payd to the mynstrels of corpus day christi ----- 4d
- 9- Item payd for the ryngyng of the same day ----- 2d
- 10- summa £5 10s 10d
- 11- Item in expense don be the hands of the Chavmerlayns in al maner chargs £3
- 12- 14s 6d ob
- 13- the sume of the stoke althyngs covntyd & aloyd < the s > delyveryd to the
- 14- hands of William Curwyn chosum for aldyrman the next yere foloyng
- 15- is £69 16s 3d
- 16- summa totalis de claro £69 16s 3d

【史料 2】

[5v] [1490]

- 1- Compotus Willelmi Fewlar aldermanni Roberti Heynesune et Johannis Feshar camerariorum
- 2- Gilde Sancte trinitatis None Lafford anno domini millesimo cccc nonagesimo
- 3- made that Willyam Fewlar afforesed made hys acownt on the manday next after the ffest of

- 4- the translacion of seynt Thamas of Caunterberi in the yere afforesed deliveryd to
- 5- Willyam Pynder affore Thomas Leke gentylman Willyam Tolly Robert Betesune
- 6- Richard Wecham with odyr personeys in the hoole stokke of the trinite gylde
- 7- in redy mony £39 2s 9d

【史料 3】

[4v] [1484-5]

- 1- Compotus Johannis Gylberd Aldermanny Willelmi Gymson et Johannis Stonham
- 2- camerariorum Gilde Sancte Trinitatis None Lafford anno domini millesimo cccc
- 3- lxxx <trecis> quarto et <quarto> qanto . . .
- 4- made that Jhon Gylberd aldermane afforesed made hys acowntts for the seyde yerys
- 5- and receyvyd of Robert Appulby clerly all thyngys countyd and alowed
- 6- with <byllys> parcell here afyr ffoloyng ----- £60 et 10s 21d
- 7- Item Robert Appulby shall answere and discharge of it He has in his owne hand
- 8- of the seyde stokke affore sed ----- £5 14s 4d
- 9- And also the seyde Robert <shall> has indentyd with the aldyrmene Willyam Cwrwyne
- 10- of certen <sumys> parcellys the wheche apperys be byllys indentyd betwyx them
- 11- The seyde Jhon Gylberd aldyrmene delyveryd to the handys offe Willyam
- 12- Curwynne alle thyngys counetyd and alowyd in redy mony
- 13- with the byllys affore reheryd ----- £60 £15 4s 5d

14- <The seyde Willyam Curmyne has reseyyd in mony be>

[5r] [1486]

- 1- Compotus Willelmi Curwynne aldermann Johannis Stonham & Willelmi Wakefelde
- 2- camerariorum Gilde Sancte Trinitatis None Lafford anno domini millesimo cccc lxxx sexto
- 3- made that Willyam Cwrwyn afforesed made hys acounte in the ffest of
- 4- seynt Botulfe the yere afforesed has receyvyd affore Thomas Balard
- 5- Wyllyan Stonham with odyr bredyr in redy mony ----- £60 13s 5d
- 6- Item the remaynys in byllys in the handys of Robert Appulby ----- £11 3s 8d & so he has
- 7- Item in <the handys of Jhon Gylberd> be byllys remeynyng to the same stokke ----- £6 15s 5d
- 8- <Off that £11 £3 6s 8d that he payd to the wrights to the bylle>
- 9- Summa totalis ----- £78 12s 4d

【史料 4】

[13r] [1516]

- 1- Made acount made of the trenete gyeld jn the Reyne of Kyeng Herre the viij
- 2- the <ix> viij yere of hys Reyne before master Car Rechard Stohnham John Fecher
- 3- John Jepson Robert Tolle John Bat letst John Gregs with dyffors odor more
- 4- beyng there present Foryst Robert Bolar the yonger chamberlayn broght jn
- 5- of newe bredur ----- 17s 8d Thomas Gybe the elder chamberlayn

- 6- broght jn of the eldyr bredur ----- £4 7d John Dicson the alderman
- 7- broght jn of the jncres of the stoke ----- 22s 6d The Some that John
- 8- Dicson chall delyver to John Fecher behyng halderman for the yere
- 9- folohyng and the sayed John focher is charged with £33 and 7s
- 10- with the byls of ----- 8s and 4d